View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

【審査論文】

「気になる子」に対する保育者と保護者の評価
－SDQ（Strengths and Difficulties Questionnaire）を利用して

大神優子

Comparisons between parents' and child nurse's evaluation for difficult children
－SDQ（Strengths and Difficulties Questionnaire）

Yuko OHGAMI

キーワード：「気になる子」　SDQ　保育者　保護者

要　約

「友達とのトラブルが多い」「落ち着きがない」など、保育者にとって「気になる子」がいるとき、保護者にどのように情報を伝え、連携していくかは重要な課題である。特に、保育者と保護者との間でその子に対する認識にずれがある場合、対応に苦慮する保育者は多い。本研究では、このような認識の差が考えられる場合の対応に向けた基礎資料を得るため、私立保育所の４歳児の保護者21名及び担任保育者１名を対象に、同一基準で子どもの評価を求める質問紙（SDQ: Strengths and Difficulties Questionnaire）調査を実施した。両者の認識がどの程度異なるか、どのような側面で差が見られるのかの実態把握を行い、これらの資料の活用上の留意点について検討した。その結果、以下の３点が示された。（１）保育者と保護者のずれは、総合して保育者が「心配」、保護者が「心配なし」とするケースがほとんどであり、保護者の方がより楽観的であった。（２）保育者では情緒面、保護者では向社会性についてより心配していた。これらの差は、両者の視点の違いだけではなく、保育の場と家庭で子どもの姿が異なることを反映した可能性がある。（３）これらの資料は保育者の保護者対応に有効だが、保育者によっては園長等によるフォロー体制が必要であることが示唆された。

和洋女子大学　人間・社会学系心理学・教育学研究室

問　題

「友達とのトラブルが多い」「落ち着きがない」など、保育者にとって「気になる子」がいるとき、保護者にどのように情報を伝え、家庭と連携していくかは重要な課題である。特に、保育者と保護者との間でその子に対する認識に「ずれ」があるように思われる場合、対応に苦慮する保育者は多い。

全国保育士養成協議会による保育士養成校卒業生の調査報告（2010）によると、保育士が職務上の難しさや大変さを感じることとして、「保護者との関係をむすぶことの難しさ」が経験年数を問わず多く挙げられている。中でも「気になる子」の情報の伝え方については、「対応が難しい子どもへの対応や、障害までも認められていないが、他の同じ月齢の子ども達と比べて、行動などが違うと感じられる子への対応とその親への状況の伝え方は難しいなと思います。保護者への対応は大変なこともあり、一番気を遣う所です」（p.104）との指摘がある。

「気になる子」については、保育現場では増えつつあるという認識があり（嘉数・財部・上地・石橋，2007）、職業上の専門性を高めるための研修テーマとして最も希望が多いものとして「障害のある子どもの保育や支援」が挙げられている（全国保育士養成協議会，2010，p.77）。しかし、保育者と保護者との認識は必ずしも一致していない。例えば、諏訪・強矢（2006）及び強矢・諏訪（2006）は、「しつけ・生活面」「性格・情緒面」「発育・発達面」「対人面」の４側面の発達について、「気がかりの有無」を幼稚園と保育所の保育者及び保護者に尋ねた結果を報告している。立場の異なる三者の回答を比較した結果、幼稚園・保育所の保育者の気がかりの程度や内容がほぼ一致していたのに対し、保護者でもっとも多かった回答は「特に心配な点はない」であり、保育者と保護者の認識のずれが大きいことが示された。また、幼稚園・保育所に加えて小学校教諭も対象とした丹羽・酒井・藤江（2004）の調査も同様の傾向であり、幼稚園・保育所・小学校の保育者または教員よりも、保護者の方が、子どもの姿（基本的な生活習慣の確立、協調性、自主性、対人スキル等）をより高く評価する傾向があったという。このような「ずれ」が自覚されているかどうかについては、より直接的に、保護者・保育者に対して「食い違い」の有無を尋ねた報告がある（鈴木・堀江・若松・喜多村，1999）。「園の方針」「子どもの遊び」「子ども同士の関係」「子どもの見方」「生活習慣」「習い事」の６項目について、保育者または保護者との食い違いの有無を尋ねたところ、全体に保育者の方が保護者よりも食い違いを感じる割合が高かった。これらの調査から、保育者は、子どもについて保護者よりも多くの発達課題を認識しており、かつ、それらを保護者と共有できていないように感じていると考えられる。

中でも、保育者・保護者に共通して食い違いがあるという回答が多かったのは「子どもの見方」であり（鈴木ら，1999）、「気になる子」を含めた子どもの認識に関しては、特に慎重な個別対応が必要と考えられる。しかし、保育者と保護者の認識のずれを指摘した上述の研究では、保育者に、個々の保護者または子どもについてではなく、保護者または子ども全体の傾向について尋ねている。これらの調査からのデータは、一人の子どもを巡って保育者と保護者の間にどのような認識のずれがあり、それを踏まえてどのように情報を伝えるべきか、という個別対応の資料に利用するのは難しい。また、質問項目が独自に設定されていることが多く、以下の問題点がある。第１に、質問項目の妥当性が検証されていない。第２に、保育者と保護者のずれが相対的なものに限定されてしまい、どの程度のずれが問題であるのかが把握できない。

従って、何らかの形で検証された項目について、保護者が自分の子どもに対して回答するのと同様に、保育者が子ども１人１人について回答し、両者を対応させて比較できるような試みが必要であると考えら

れる。

標準化された質問紙に相当するものを用いて子どもについての保育者と保護者の見方を比較した試みは、これまでにも少数ではあるが報告されている。例えば、矢澤・栗崎・萩原・横山・海沼（1999）は２歳児クラスの４事例について、TTS（Toddler Temperament Scale）日本語版（12～36か月児対象）を用いて、保育者・保護者の回答をもとに詳細なプロフィール分析を行った。しかし、TTSは97項目にも及び、保育者が担当する多くの子について評定するのは極めて難しい。時間的な制約の中、必要な情報が得られ、かつ、全員分を評定する担任への負担が比較的軽くなるように配慮すると、20～30項目程度が限度と考えられる。実際、石川・大六・長崎・園山・宮本・野呂・多田・岡崎・東原・竹田・柿澤（2007）で用いられた５歳児発達障害スクリーニング質問票は、保護者用17項目、担任教諭用23項目であった。また、辻野・雄山・田靡（2008）は、５歳児42人について、母親にはECBI（Eyberg Child Behavior Inventory）36項目とMAI（Maternal Attachment Inventory）26項目の評定を依頼し、保育者にはECBI36項目から28項目を抽出して評定させるという工夫によって、保育者の評定項目数を減らしている。ただし、これらの質問項目にも、質問文が多義的に解釈されるという問題点（石川他，2007）や、研究によって因子内容が異なる（辻野他，2008）など尺度として不安定な面が見受けられる。さらに、実際に保育者と保護者との間にずれが見られた場合、どのように保育の場に還元していくべきかの検討が不十分である。

そこで、本研究では、このような保育者-保護者間の認識の差が考えられる場合の対応の基礎資料を得るため、保育者・保護者双方に対して同一基準で子どもの評価を求める質問紙として、SDQ（Sterengths and Difficulties Questionnaire,Goodmann,1997）日本語版（以下、SDQ）を採用した。SDQは行動上の問題をもとにしたスクリーニングのために開発された質問紙で、全25項目で構成されている。総合得点の他、「行為」「情緒」「多動・不注意」「仲間関係」「向社会性」の５つのサブスケールについての得点を算出することができ、各国で因子構造等が安定していることが確かめられている。日本での基準値も、４-12歳の保護者2899名の調査（Matsuishi, Nagano, Araki, Tanaka, Iwasaki, Yamashita, Nagamitsu, Iizuka, Ohya, Shibuya, Hara, Matsuda, Tsuda, & Kakuma，2008）をもとにして公表されており、支援の必要性についてHigh Need、Some Need、Low Needで判定可能である。

従って、子どもに関する保育者と保護者の間の認識差について客観的に把握し、さらに、保育の場でのこのような手法を用いる際の留意点についての示唆が得られると考えられる。

目　的

本研究の目的は、子どもについての保育者と保護者の認識の違いを質問紙（SDQ）を用いて明らかにし、それを踏まえた保育者・保護者支援の提言を行うことである。そのため、以下の分析を行う。

（１）保育者・保護者双方の子どもに対する認識がどの程度異なるか、また、特にどのような側面で差が見られるのかについての実態把握　＜SDQによる測定と比較＞

（２）資料の活用上の留意点の検討　＜保育者へのインタビュー＞

方　法

対象

東京都内の私立保育所４歳児クラスに在籍する23名のうち、同意が得られた保護者21名（男児の保護

者14名、女児の保護者７名）及び保育者（担任保育士：以下担任）１名[1]。この保育士は10年以上の保育経験があり、今回の対象クラスを春からだけではなく、２歳児クラス時点でも担当していた。

質問紙

SDQ日本語版（３－４歳用）に、「日ごろの様子について気になること」についての自由記述欄を追加して作成した。SDQは「お子さんのここ半年くらい（または今のクラスになってから）の行動について」、全25項目（例：「おちつきがなく、長い間じっとしていられない」）それぞれで、「あてはまらない」・「まああてはまる」・「あてはまる」の３段階で回答を求めた。

調査時期

2009年８月（質問紙配布）～11月（担任へのフィードバック）。

手続き

保護者への質問紙は、封筒に入れて封をした状態で、担任を通じて配布・回収した。担任には別に、クラス全員分の評定を求めた。保護者・担任双方のアンケート回収後、担任に対象児１人１人について、保育者と保護者のサブスケール５種の評定及び総合評価、自由記述を比較したフィードバックを行った（Figure 1 に一部例を抜粋）。さらに、担任に対して今後の活用法等についてのアンケートを郵送し、この回答について電話にて補足インタビューを行った。具体的な質問内容は、①SDQ評定の労力、②評定自体の保育への影響、③フィードバックの保育への影響、④今後の活用予定であった[2]。

		心配	ちょっと心配	心配なし
我の強さ	保護者	●		
	担任	●		
落ち着きのなさ	保護者		●	
	担任			●
気持ちが不安定	保護者			●
	担任			●
お友達との関係	保護者			●
	担任			●
思いやり・優しさ	保護者			●
	担任			●
全体	保護者		●	
	担任			●

		心配	ちょっと心配	心配なし
我の強さ	保護者			●
	担任		●	
落ち着きのなさ	保護者			●
	担任	●		
気持ちが不安定	保護者			●
	担任	●		
お友達との関係	保護者			●
	担任			●
思いやり・優しさ	保護者			●
	担任			●
全体	保護者			●
	担任	●		

Figure 1　担任へのフィードバック例

データ処理

保護者評定・担任評定それぞれの25項目について、「あてはまらない」を０点、「まああてはまる」を１点､「あてはまる」を２点として総合得点（０～50点）及び５サブスケール（「行為」「多動･不注意」「情緒」「仲間関係」「向社会性」）の得点（０～10点）を算出した。さらに、Matsuishi et al.（2008）の基準値（High Need, Some Need, Low Need）をもとに、各得点を「心配」「ちょっと心配」「心配なし」の３

[1] さらに担任からみて「特に気になる子」数名については、担任以外の保育者にも評定を依頼し（対象児と評定者の選択は担任による）、担任との比較を行った。本稿では詳細は省くが、保育者同士の評定差はほとんど見られなかった。

[2] これらの手続きに際しては、和洋女子大学の「ヒトを対象とする生物学的・疫学的研究に関する倫理委員会」による承認を得た。

レベル[3]に分け、総合得点またはサブスケールのいずれかで保護者及び担任の評定で「心配」と「心配なし」という著しい差が見られた事例（例：保護者評定は「心配」レベルであるが、担任評定は「心配なし」）を抽出した。

結　果

1．保護者及び担任の評定結果

Table 1 に、サブスケールごとに、各項目の保護者及び担任の全員分の評定平均値を示した。サブスケールごとにそれぞれの基準値（Matsuishi et al.,2008,Table ６）と比較すると、保護者評定平均では「行為」「向社会性」が「やや心配」レベルであった。一方、担任評定平均では「行為」が「やや心配」レベル、「情緒」が「心配」レベルであった。

Table 1　保護者及び担任の評定平均（N＝21）

サブスケール（保育者用に言い替えた表現）及び項目順序		保護者	担任
行為（我の強さ）		3.19	4.71
5	カッとなったり、かんしゃくをおこしたりする事がよくある	0.71	1.05
7	素直で、だいたいは大人のいうことをよくきく※	1.24	0.81
12	よく他の子とけんかをしたり、いじめたりする	0.38	1.10
18	よく大人に対して口答えする	0.76	1.14
22	他の人に対していじわるをする	0.10	0.62
情緒（気持ちが不安定）		1.14	5.10
3	頭がいたい、お腹がいたい、気持ちが悪いなどと、よくうったえる	0.14	0.90
8	心配ごとが多く、いつも不安なようだ	0.00	0.43
13	おちこんでしずんでいたり、涙ぐんでいたりすることがよくある	0.19	1.48
16	目新しい場面に直面すると不安ですがりついたり、すぐに自信をなくす	0.48	1.00
24	こわがりで、すぐにおびえたりする	0.33	1.29
多動・不注意（落ち着きのなさ）		4.57	4.14
2	おちつきがなく、長い間じっとしていられない	0.81	1.05
10	いつもそわそわしたり、もじもじしている	0.05	0.57
15	すぐに気が散りやすく、注意を集中できない	0.90	1.29
21	よく考えてから行動することができる※	1.62	0.81
25	ものごとを最後までやりとげ、集中力もある※	1.19	0.43
仲間関係（お友達との関係）		1.52	2.19
6	一人でいるのが好きで、一人で遊ぶことが多い	0.29	0.57
11	仲の良い友だちが少なくとも一人はいる※	0.10	0.38
14	他の子どもたちから、だいたいは好かれているようだ※	0.67	0.14
19	他の子から、いじめの対象にされたり、からかわれたりする	0.19	0.33
23	他の子どもたちより、大人といる方がうまくいくようだ	0.29	0.76
向社会性（思いやり・優しさ）		5.65	7.33
1	他人の気持ちをよく気づかう	1.15	1.57
4	他の子どもたちと、よく分け合う（おやつ・おもちゃ・鉛筆など）	0.90	1.33
9	誰かが心を痛めていたり、落ち込んでいたり、嫌な思いをしているときなど、すすんで助ける	1.14	1.52
17	年下の子どもたちに対してやさしい	1.45	1.43
20	自分からすすんでよく他人を手伝う（親・先生・子どもたちなど）	1.00	1.48
総合		10.38	16.14

注）得点が高くなるほど「心配」になるよう逆転項目（※）は調整済み。

[3] 保護者へのフィードバックのため、Needを「心配」とした。

２．保護者及び担任の評定の「ずれ」

個別に、保護者及び担任の評定を比較した。Table２に、総合得点またはサブスケールのいずれかで保護者及び担任の評定で「心配」と「心配なし」という著しい差（例：保護者評定は「心配」レベルであるが、担任評定は「心配なし」）が見られた事例と項目を示した。

Table２　保護者及び担任の間で「心配なし」「心配」の差があった全事例とその項目

	性　別	総　合	行　為	移動・不注意	情　緒	仲間関係	向社会性
事　例　1	男	▲	▲	▲	▲		△
事　例　2	男	▲	▲	▲	▲	▲	
事　例　3	男	▲	▲		▲		
事　例　4	男	▲	▲		▲		
事　例　5	女	▲		▲	▲		
事　例　6	男	▲		▲	▲	▲	
事　例　7	男	▲	▲				
事　例　8	女		▲		▲		
事　例　9	女				▲		
事　例　10	男			△	▲		△
事　例　11	女				▲		
事　例　12	男						△
事　例　13	女					▲	

注）一方のみが「心配」と評定した場合　▲：担任のみ　△：保護者のみ

総合得点では､21人中７人（33.3%）で、担任が「心配」レベルであった一方で、保護者は「心配なし」という差があった。一方、保護者のみが「心配」と評定した子はいなかった。なお、保護者と担任がともに一致して「心配」レベルとした子は、21人中２人であった。

次に、各サブスケールの「ずれ」を見ると、保護者と担任で差があった延べ27カテゴリ中23カテゴリ（85.2%）で、総合得点同様、担任のみが「心配」と評定していた。中でも、「目新しい場面に直面すると不安ですがりついたり、すぐに自信をなくす」等の項目からなる「情緒」サブスケールで差がある事例が最も多かった。保護者のみが「心配」レベルで評定したのは延べ27カテゴリ中４カテゴリであったが、そのうち３カテゴリが「年下の子どもたちに対してやさしい」等の「向社会性」サブスケールであった。

３．担任インタビュー

SDQの評定について尋ねたところ、１人当たりの評定の所要時間は３～５分で、評定作業の労力は「とても大変」～「とても簡単」の５段階の真ん中の「どちらでもない」であった。

また、評定作業自体が、現在の保育に対して「とても参考になる（なった）」とのことであった。具体的には、対象児全員について同じ項目で評定することで『自身の子どもに対する視点の見直し』『自分の保育を客観的に振り返るきっかけ』になったという指摘があった（『』内は担任の表現）。

さらに、各対象児について保護者と担任それぞれの評価を比較したフィードバック（Figure１参照）についても同様に、「とても参考になる（なった）」とのことであった。具体的には、『伝わっていないかもしれないと思っていたらやっぱり』『ここまで差があったとは思わなかった』などの担任のこれまでの「ずれ」の印象が裏付けられたり補強されたりした例や､『意外なところで心配している保護者がいたのでフォローの必要を感じた』という例があった。

これらを踏まえ、今後は『保護者の児に対する認識を理解することで、保護者へのアプローチの仕方を

かえていきたい』とのことであった。なお､これらの「ずれ」については、今でこそ参考にできるものの、保育経験のない頃に知ったら『自分がこんなに（保護者の子どもに対する認識を）わかってなかったんだ、とショックを受けて自信をなくしたかもしれない』という指摘があった。

考　察

本研究では、子どもについての保育者と保護者の認識の違いを客観的に把握し、この結果を踏まえた保育者・保護者支援の提言を行うことを目的に、保育者と保護者のSDQの評定と保育者へのインタビューを分析した。以下、順に考察する。

１．保育者・保護者の子どもに対する認識の差

保育者･保護者の同じ子に対するSDQの評定を比較した結果、全体に、保育者が何らかの側面で「心配」レベルと評定している子どもに対し、保護者は「心配なし」と認識している「ずれ」が多いことが明らかになった。保護者の方が楽観的であるという傾向は、これまでの保護者全体に対する保育者の認識と保護者の認識を比較してきた先行研究（鈴木他，1999；諏訪・強矢，2006；強矢・諏訪，2006）と一致する。

個々の事例をみると、「情緒」面で保育者のみが「心配」レベルで評定している事例が多かった。一方、保護者のみが「心配」レベルであるのは「向社会性」面が多かった。

これらの差の理由としてまず考えられるのは、両者の評価基準の差である。多くの子どもに接している保育者と、自分の子どものみに注目する保護者とでは、評価基準や着目点が異なる可能性がある（丹羽他，2004）。ただし、「心配（High Need）」レベルは保護者が評定したMatsuishi et al.（2008）では上位10％程度とされているが、本研究の対象児（保育者評定）ではより頻度が高く、クラスの特性か保育者の評定傾向なのかについては、今後の検証が必要である。

保育者と保護者の評定差のもう一つの理由としては、集団での保育の場と家庭という異なる場所で、子どもたちが見せる姿の違いが評定に反映されていることが考えられる。例えば、多くの面で保育者の方がよりネガティブな評価を行った一方で､「向社会性」は、保護者のみが「心配」とした。このカテゴリには、「他の子どもたちと、よく分け合う」「年下の子どもたちに対してやさしい」など、同年齢・異年齢の集団内での行動から判断する項目が含まれている。保育者のみが「心配」とした「情緒」面についても同様に、「こわがりで、すぐにおびえたりする」「目新しい場面に直面すると不安ですがりついたり、すぐに自信をなくす」のように家庭では観察しにくいかもしれない項目が含まれている。

石川他（2007）は、発達障害児のスクリーニングのためには、保護者ならではの気づきと保育者ならではの気づきの両面があり、両方の立場からの観察が必要､と指摘している。本研究で見出された「ずれ」に関しては、無理矢理修正するのではなく、家庭ではそのような行動が観察されていない可能性を踏まえて園での様子を伝えるなどの対応が必要かもしれない。

２．資料の活用上の留意点

本研究で、担任には、担当する子ども23名（うち保護者との比較は21名）分の25項目の評定を依頼した。担任からは、全員を一定基準で評定することや、保護者との差が明示化されることによる効果が指摘された。１人当たり３～５分と簡便に評定でき、評定作業自体が「保育の振り返り」に役立ったことから、保育者の子ども理解のツールの一つとして十分利用できると考えられる。矢澤他（1999）は、共通の質問

紙（TTS）による保護者･保育者の子ども評価に期待することとして、①保育者･保護者のコミュニケーションの媒体、②保育者の子ども理解の促進（担当者間の共有も含む）、③親の子ども理解の促進を挙げている。本研究では親の子ども理解については調べていないが、保育者に関しては、より簡便な質問紙（SDQ）で同様の効果が得られることが示唆された。また、SDQは、TTS（全97項目、活動水準・周期性・接近性・順応性・反応の強さ・機嫌のよさ・注意の範囲と持続性・散漫性・敏感性の９特性）と比較すると、サブスケールの種類が限定され、保護者との差も「心配」対「心配なし」のように単純化されていてわかりやすい。少数事例の検討ではなく、クラス全体を把握するような今回のケースでは、項目数と一覧性の点で、SDQの方がより適切であると考えられる。

ただし、簡便に利用できる分、実際の活用には配慮が必要である。子ども理解の促進という点では初任者への応用が期待できるが、保護者との差の明示化については、慎重にフィードバックを行うべきであろう。経験年数によって子どもの認識や保護者とのずれの認識が異なり、ある程度経験を積んだ保育者に比べると、初任者は保護者とのずれを認識しにくいことが指摘されている（鈴木他，1999；嘉数他，2007；全国保育士養成協議会，2010）。また、「自分の仕事に自信がなくなった」ことを理由に職を離れると、資格を保持しているにもかかわらず、保育・福祉関係の職場へは戻りにくいという報告がある（全国保育士養成協議会，2010）。本研究で担任から指摘があったように、子どもに対する認識が保護者と一致していると思っている初任者に、いきなり「ずれ」を突きつけて自信喪失させることがないよう、園長や主任が関わり、フォローできる体制が必須と考えられる。

また、本研究では主に保育者と保護者の「ずれ」に着目してきたが、両者の「一致」も家庭との連携に有益な情報であろう。特に、「気になる子」の場合、保育者・保護者の認識が一致していることが明らかであれば、日々の連絡事項での配慮や専門機関への橋渡し等で、対応がしやすくなると考えられる。

最後に、本研究の限界を踏まえて、今後の課題について以下の３点を挙げる。

第１に、質問紙の修正（自由記述の追加）である。SDQ自体は確立された質問紙であるが、スクリーニング目的であるため、全体にややネガティブな項目が多い。「気になる子」についてだけではなく、クラス全体について保育者が情報を得られるアンケート、と考えると、ポジティブな面の自由記述（例：注目して欲しいこと・誉めたいこと・できるようになったこと）等の追加を検討する必要があるだろう。

第２に、別クラス・別評定者による検証である。本研究は１クラス及びその担任保育士１名のみを対象としており、担任の評価の偏りやクラスの特性の影響を受けている可能性がある。年齢・規模の異なるクラスで、また、経験年数の異なる保育者による検証が必要と考える。さらに、同じ子どもに対して複数の保育者が評定することで評価の客観性を確保するなどの工夫が必要であろう。

第３に、他の既存の質問紙との比較である。本研究では簡便性・妥当性の観点からSDQを使用したが、類似の情報を得られる質問紙（例:ECBIでは「欲求不満行動」「集中力の欠如」「反抗的行動」「怠惰行動」の４因子）との比較検討が必要であろう。その際には、保育の場でのコミュニケーションまたは子ども理解のためのツールとしての使い勝手と、スクリーニングテストとしての鑑別性が異なる可能性があることを考慮する必要がある。

本研究では保育者と保護者の「ずれ」を中心に取り上げたが、身近な大人達に、自分の異なる面をみてもらえることは、子どもにとって不利益となるとは限らない。家庭と保育の場のより良い連携のためには、ずれと同様、複数の目で見ることの利点にも留意していくべきであろう。

付　記

調査にご協力下さった保育士並びに保護者の皆様に、心より御礼申し上げます。特に担任の先生にはお忙しい中、数々の貴重なご意見をいただきました。なお、本研究の一部は、日本保育学会第63回大会（2010年５月23日，松山東雲女子大学・松山東雲短期大学）で発表しました。学会会場でご教授下さった先生方に感謝致します。

引用文献

Robert，Goodman．The Strengths and Difficulties Questionnaire: A Research Note. Journal of Child Psychology and Psychiatry．1997，38，p.581–586.

強矢秀夫，諏訪きぬ．乳幼児の発達保障と幼保問題（その３）－幼稚園と保育園における保育者と保護者の子どもの発達的理解の差の分析を中心に．明星大学教育学研究紀要．2006，21，p.57–65.

石川有美・大六一志・長崎勤・園山繁樹・宮本信也・野呂文行・多田昌代・岡崎慎治・東原文子・竹田一則・柿澤敏文．５歳児発達障害スクリーニング質問票の妥当性の検討. 障害科学研究. 2007, 31, p.75–89.

嘉数朝子，財部盛久，上地亜矢子，石橋由美．保育者の「ちょっと気になる子」の認識と保育に関する研究I－子ども観との関連で．琉球大学教育学部紀要．2007，70，p.25–35.

丹羽さがの・酒井朗・藤江康彦．幼稚園、保育所、小学校教諭と保護者の意識調査－よりよい幼保小連携に向けて．お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要．2004．２，p.39–50.

諏訪きぬ，強矢秀夫．乳幼児の発達保障と幼保問題（その２）－子育て支援に関する保護者と保育者の意識の分析を中心に．明星大学教育学研究紀要．2006，21，p.47–56.

鈴木佐喜子，堀江まゆみ，若松美恵子，喜多村純子．保育者と親の食い違いに関する研究－保育，子育ての問題を中心に．保育学研究．1999，37（２），p.200-208.

Toyojiro，Matsuishi；Miki，Nagano；Yuko，Araki；Yoshiyuki，Tanaka；Mizue，Iwasaki；Yushiro，Yamashita；Schinichiro，Nagamitsu；Chiho，Iizuka；Takashi，Ohya；Kunihiko，Shibuya；Munetsugu，Hara；Kentaro，Matsuda；Akira，Tsuda；Tatsuyuki，Kakuma．Scale properties of the Japanese version of the Strengths and Difficulties Questionnaire（SDQ）: a study of infant and school children in community samples．Brain and Development．2008，30，p.410–415.

辻野順子・雄山真弓・田靡みつ子．子どもの問題行動と母親の愛着との関連性、並びに子どもの問題行動に対する母親評価と保育士評価の相違性について．関西女子短期大学紀要．2008，17，p.１－９.

矢澤圭介，栗崎久美子，萩原亜希子，横山直美，海沼和代．子どもの気質評価の親－保育者間での「ずれ」について－その１：保育者の子ども理解への応用．立正大学社会福祉研究所年報．1999，１, p.137–152.

全国保育士養成協議会．「指定保育士養成施設卒業生の卒後の動向及び業務の実態に関する調査」報告書II－調査結果からの展開．保育士養成資料集．2010，52.

大神　優子（和洋女子大学人間・社会学系講師）

（2010年９月24日受付　2010年11月16日受理）